

# 東奥日報

2022年(令和4年)8月25日(木曜日) (14)



星野 保 八工大工学科生命環境科学コース教授

## 八甲田の気候が育てる

最近、本県でも光るきのこが見つかる。それもツキヨタケでなく、亜熱帯に分布するヤコウタケの仲間だ(おいけんこ)。

NPO法人奥入瀬自然観光資源研究会の『奥入瀬渓流きのこハンドブック』に写真が載っている。

私も突発的にネタを探しに八甲田に向かったが、残念ながら見つからない(専門外のきのこなら、詳しい方に同行しないと、まずいかな)。では、す(す)こと帰ってきたのかというと、そうでもない。見たのだ! 盛夏の7月上旬に私の好きな菌を! その名もフキガマンホタケモドキだ。

初回に記したように、私は雪の下で活動する菌を調べている。彼らは、

### <5> 夏に出現 気の早いきのこ



【写真左上】酸ヶ湯キャンプ場周辺で見かけたフキガマンホタケモドキ(2022年7月9日確認) 【同左下】フキガマンホタケモドキの成菌を拡大すると先端に向かって徐々に膨らんでいく。カサはないが、これで成菌だ【同右】フキガマンホタケモドキの胞子から培養した菌糸体。培地上で菌核(カサブタ状のもの)をつくる

自らを増やすために胞子をまくのだが、雪が積もればそう広げられない。そのため、積雪前にきのこを出す、と思っていた。例えば、フキガマンホタケモドキが真夏の7月上旬にきのこになっていくことに、驚いた。あんな

たちよっと、気が早すぎないか。ただ調べてみると、下北の東通村や、白神山地で夏に記録がある。私がみた酸ヶ湯辺りは、5月ごろまで積雪がある。そして7月にはきのこが出るなら、10カ月も活動するのか。随分と働き者だ。よく考えると、これは菌の性質と観察地の気候の兼ね合いで、菌の活動範囲が決まるのだ。酸ヶ湯周辺の夏の最高気温は21度程度で、フキガマンホタケモドキは人工条件ならば20度付近でよく成長する。つまり、湿った日陰なら、夏の八甲田でも全然問題ない。雪腐病菌のガマンホタケは、より寒さを好み、20度で成長できない。だから夏を越すために菌核(相当乱暴に言つと、きのこの種だね)と呼ばれる耐久器官をつくり、こ

※月1回掲載します。



れで休眠する。フキガマンホタケモドキも菌核をつくるのだが、条件によって、菌糸体から直接きのこが出る。「フキガマンホタケモドキ」は標準和名だが、「モドキ」というように公式に「けなされて」いるのは、この融通無碍な生き方が災いしているのかもしれない。だが、遺伝子解析によりガマンホタケの正当な一員であることが判明している。

夏の盛りにフキガマンホタケモドキは、胞子を飛ばし、その胞子は発芽し、草むらで菌糸を張り巡らす。そして菌糸の塊は日差しを感じて、また、きのこになる。これを根雪になるまで、繰り返すのだろう。そして雪の下では、菌糸がじゅくりと植物を分解するのだ。

最近、そんな生きざまを観察するため週末は、酸ヶ湯に通っている(当然、別の楽しみもある)。

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」

【同右】フキガマンホタケモドキの胞子から培養した菌糸体。培地上で菌核(カサブタ状のもの)をつくる